

南條範夫

見えない鎖





南
條
範
夫

見えない鎖



KODANSHA

© 南條範夫 一九六一

昭和三十六年八月二十日 第一刷発行

三〇〇円

著者 南條 範夫

発行者 野間 省一

印刷所 株式会社 常磐印刷所

発行所 株式会社 講談社

振替 東京 三九三〇
電話大塚(九四)大代表三一一一

(製本 文信社)

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目次

疑惑の発生	5
Aの場合	27
Eの場合	71
Iの場合	127
Sの場合	185
Wの場合	230
疑惑の終末	253

見
え
な
い
鎖

装幀中井幸一

疑惑の発生

1

岩田修一と三浦玲子とが結婚すると言う事が公けにされると、皆が、吃驚した。

社員同士の結婚と言うこと自体は、大して珍らしくはなかったが、この二人の取り合せが、凡そ誰にも絶対に考えられそうもないものだったからである。

殆ど凡ての男の社員たちにとって、明らかに玲子に対する評価の方が高かったのは当然であるが、女たちの間でさえ、

「いやあねえ。岩田さんなんかと——」

「玲子さんたら、どうしたのかしら」

と言う会話が、数カ処で交わされた。

と言っても、岩田修一が、特に結婚の対象として、問題にならぬほどの存在であった訳ではない。

一応、大学は出ていたし、容貌も十人並だったし、勤務振りも正常だった。その上、家柄もよく、家は相当の財産があるらしいと言う噂でもあった。

ただ、修一は、やや陰気臭いところがあり、何となく固苦しく、ぎごちない感じで、若い女性たちにもてると言うタイプでない事は確かであった。

若い女子社員たちの彼に対する評価は、だから、不当に低かったと言ってもよい。婚期を逸しかけている年齢の女たちは、もう少し高く彼を評価した。それらの女の中には、

——学歴も、容貌も、財産も——あれなら立派なものだわ。あの人のいい処は、若いひとに

は分りゃしないんだわ。

と判断した上、修一に接近したのもあった。だが、修一に、木で鼻をくくった様な態度で応酬されると、

——えらそうにして、厭な奴ね、あれじゃ、女に好かれないの当り前だわ。
と、評価を訂正した。

男たちの間では、

——つき合いの悪い奴だな。

——君子ぶって、いやな野郎だよ。

——と言うのが定評だったし、せいぜいのところ、

——世間知らずだね、独りっ子で甘やかされて育てられてきたからだろうな。
と言う位が、最上の弁護であった。

玲子の方は、男にも、女にも好かれていた。勿論、前者の間で、より好評だったが。

明るくて、健康で、清潔で、素直だったのだから、当然である。

男たちは、少しがっかりした。

「三浦君もなあ、よりによって、岩田なんかを掴まなくったってよさそうなものだがなあ」
「分らねえな、全く、女ってものは。彼女、案外、岩田の財産に惚れたのかも知れないぜ」

「ばか言え、あのひとはそんな女じゃないさ」

「じゃ、岩田のどこに、そんな魅力があるって言うんだ」

「おれに憤ったって仕方がねえよ、まあ、飲め」

彼らの中には、本当に憤慨し、非常に落胆し、半ば自棄になったものさえいた。玲子に言いよって、やんわりと拒絶された経験のあるものたちであった。

玲子がもし、そのまま勤めを続けていたら、何かの折、いやな思いをしたかも知れない。だ

が、彼女は、岩田との結婚の決まったことを告げると、同時に、会社を罷めた。

社内結婚をしてからも、夫婦揃って勤めを続けている者もいくらあったが、会社側としては、女の方が罷めてくれることを希望していたから、安藤人事部長は、最大限の祝福の言葉を以て玲子を送り、

——結婚式には、必ず出席させて貰うからね。

と言い添えた。

結婚式は、P——ホテルで行われた。

会社からは、安藤人事部長の他、修一の属する、営業課の課長村瀬欽と、玲子のいた経理課の課長石山良平とが招かれた。

その他にも、営業課では、係長の宮沢と、修一と同期に入社した同僚の杉山忠夫とが出席し、経理課からは、玲子の同僚が五人出席した。

皆が、披露宴の、予想以上に豪華なのに驚いた。

来客も、新郎側には、相当の地位の人が多く、新聞雑誌などで、時々見かける名の人が、司会者の請に応じて、祝辞を述べた。

「岩田君の家は、相当いい家らしいな」

歸りに、宮沢が、かなり酔の廻った顔で、杉山に言った。

「ええ、僕もはつきりは知らなかったんですがね、大したものですね」

自分の結婚式は、もっとずっと貧弱な、どっちかと言えば寒々としたものだろうかと、考えながら、杉山が答えた。

「一体、君、あの二人、いつ頃から、あんな風な話になったのかね、誰も気がつかなかった様じゃないか」

「どうも分りませんねえ、岩田の奴、思い込むとがむしろになる生一本の、怖いようなとこ

ろがありますからね、無理押しに押して、三浦君をものにしちゃったんでしょ」

「ふーむ、僕は、何だかあの岩田と言う男は好きになれないんだが——」

可憐と言ってもよい、清浄な美しさをたたえていた花嫁の姿を目の前に思い浮べて、

——えい、畜生、岩田の奴、あんな美しい娘を——

と、宮沢は、腹の中で舌打ちした。

玲子の同僚たちは、帰りに、銀座に出て、喫茶店に寄った。皆が、少し亢奮していた。

「岩田さん、案外、立派だったわねえ」

「よっぽど財産があるんだわ」

「三浦さん——うまい事したのかも知れないわ、惻巧だから、あのひと」

ともあれ、修一と玲子の結婚式は、無事に終わった。

それは、多くの結婚式と同じように、出席した若い男たちには、多少エロチックな感慨を持たせ、若い女たちには、かなりの羨望の念を抱かせたものだった。

2

三日間の新婚旅行を終ると、修一は、出社した。

何日かは、会う人毎に、ひやかされた。

しかし、当人が、にこりともせずに、

——や。

と一言答えるだけなので、張りあいがなかったのだろう、いつもの場合よりも早く、そうしたひやかしの期間は終結し、この結婚の意外さも忘れられた。

このように、修一は、結婚について、外部に対しては、極めて冷静な態度を維持しつつけていたが、内容は全く正反対であった。

玲子と結婚しようと考えてから、結婚する迄、彼は心身共に、静かな暴風の中にいたのである。そして、いよいよ結婚式の終った今は、バタにくるまれて、ミルクの泉の中に浸っているような恍惚感の中にいた。

強いて勤めなくても、何とか食ってゆくだけの財産はあった。生活上の苦勞と言うものは、全く経験した事がない。

少年の頃から、交際嫌いな、孤独を愛する性格で、それが両親の憂慮の的になっていた。苦心して同じ年頃の少年を集めてきて、遊び仲間にしたが、修一は、奇妙な性癖を暴発させて、それらの少年を怖れさせた。

賑やかに遊び騒いでいる時、修一は突如、猛然たる憤怒を爆発させるのである。理由が分らずに、仲間の少年たちは、唯、啞然として、

「どうしたんだい、修ちゃん」

となだめたが、修一は、涙をためて怒りつづけた。

少年たちは、遠ざかった。

年を加えるにつれて、こうした理由の分らない突然の憤怒が現われることはなくなった。しかし、外に現われなくなった事は必ずしも、彼がそうした憤怒を起こさなかった事を意味しない。恐らく、年齢による反省力が、その暴発を押えたのだろう。そして、それだけに尚のこと、それはどす黒く、彼の体内に沈澱したのだろう。

——何か腹の底に気味の悪い塊まりを持っているようで、本当には打ちとけない奴だな。そう言う定評を、修一は平然として受け入れていた。

友人がないままに、年頃になった時、修一の想念は、空想の中の「美しい女性」をめぐる、定着した。

彼は、いつの日にか自分の生涯の伴侶になるであろう女を、現実からではなく、彼の読書に

よって得た知識と、彼自身の極めて手前勝手な性格とを基礎として組立てた。

それが美しく清らかであることは勿論であったが、彼の最も多く重点を置いたのは、その女性を、彼を、彼のみを全身全霊をあげて愛してくれるであろうことであつた。

彼は、週刊誌に、

——あなたは、結婚の對手が、純潔であることを第一条件としますか。

と言うアンケートに対する回答がのっているのをみたことがある。

女性の方には、否と言う答えが二四%もあつた。男性の方にも、否と言うのが九%あつた。修一は、それをみて、胸の中がぐくぐく震えた。

——絶対にいやだ、おれの結婚する女は、完全無欠の純潔さを持つていなければ厭だ。

その忌々しい週刊誌を丸めて、ぴしやりと机を叩きながら、そう考えた。

その癖、時々商売女を買つた。それは単純な欲情の処理の問題だと考えていた。商売女は極端に輕蔑していたのである。

両親の処に、何人か縁談を持ち込んだものがあつた。見合をすると、大抵、對手から断つてきた。色々の口実はついてしたが、結局は、修一が、若さに似合わず、陰気な感じを与えた為らしかつた。

對手が乗氣になつてきたのも若干あつたが、それは、修一の方で、頭から拒絶した。

——おれを好きになる筈はない。家の財産に目をつけているのだ。あの女は、どこか男ずれのした感じだつた。処女じゃないかも知れない。

二十八になつて、まだ嫁が決まらないので、両親が、心配している時、修一の方から、会社にいる三浦玲子を買つてくれと言ひ出したのである。

修一は、玲子が入社してきた時から、玲子に心を惹かれていた。

誰がみても、確かに、清潔な、可憐な感じだつたのだ。

しかし、多くの社員が、玲子をつけ廻しているらしい様子を見ると、
——ふん、あんな女。

と、自分の心から、追い払おうとした。今迄の、そうした場合のように、簡単には追い払えないので、驚いた。

その中、彼を悦びの波でみたすような事を耳にした。
同僚たちの会話である。

「三浦玲子、みかけによらずしっかりしてるらしいな」

「うん、さすがの山県や井上も、齒が立たないそうじゃないか」

「それが、そんな事に慣れていて、上手に外らすって言うんじゃないんだな、あんまりあの娘が清純な感じなんで、手が出せないって言うところらしいぜ」

男たちに、ちやほやされながら、女の同僚に嫉妬されていないのも、そうした理由から、競争者として見られていない為らしいと、男たちは話し会った。

さり気なく聞いていたが、修一の鼓動は、高くなった。

——そうか、やっぱり、あのひとは。

年齢にしては恐ろしく子供っぽい恋情が、修一の全身をひとつとらえた。結婚しようと、決心したのは、玲子自身と、同僚との話を盗み聞きした刹那である。

その二人は、修一の少し前を歩いてた。

友人の方が、お茶を喫んでゆこうと誘ったのに対して、玲子が答えていた。

「私、今日、早く帰りたいの」

「何か用があるの」

「ううん、でも——」

「あやしいぞ」

「そんなんじゃないの、今朝ね、急いでもんだから、お母さんの手を握ってくるの忘れたの」
「いやーだ、何言ってるのさ」

「私ね、会社へくる時でも、ほかの時でも、家を出る時はいつでも、お母さんの手を握ってくるの、お母さんが留守の時は、壁にかかっているお母さんの着物の袖をちょっと握ってくるの、そうすると何だか安心するの」

修一は、帰宅すると、直ちに、両親に玲子との結婚の希望を述べた。

玲子の身許を調査したが、格別難点はなかった。家計が豊かでない事が、修一の両親にはやや不満であつたらしいが、本人については、賞讃の言葉以外聞かれなかったし、修一の熱望していると言う事が、何よりも決定的要素となつた。

正式に申込みが行われた。

玲子の両親は、修一の外的条件から、この上もない良縁だと、悦んだ。

玲子は、会社で、もし修一と同じ課にいて、修一を充分に観察していたら、拒んだかも知れない。

だが、彼女は、修一について殆ど何も知らなかった。時々姿を見かける位だった。

——ちよつと陰気な感じの人。

とは思つたし、

——あまり人ずきはよくないらしい。

とも感じていたが、特に悪い感じは持っていなかった。

他の男のように、直接、色々な形で誘惑しようとせず、始めから正式に両親に話を持ってきてくれた事に好意を持った。

会社の外で、双方の両親に付添いで会つた時には、

——案外、情熱的な純情な人だわ。

と、判断した。

この判断は、少くも、その時の修一については、正しい。彼は、この時玲子に夢中になっていたのだし、彼がそんな感情に捉えられたのは、生れて始めての事だったのであるから。

彼女は、両親に承諾の意志表示をした。

3

修一は幸福であった。

——今時、こんな女性がいるとは、思わなかった。玲子にめぐり会ったのは、何と言う幸運だったろう。

彼は、玲子を熱愛した。愛する技術は、極めて拙劣であり、根本的には全く自己本位ではあったが少くも、彼の自己意識に於ては全心を挙げて愛したことは間違いない。

玲子も、これに応えて、修一に対して充分の愛情を示した。

彼女は、自分の結婚した對手が修一でなくても、同じように愛したに違いない。古風な、柔順な魂をもっていたから、両親が嫁けと言え、大抵の処に嫁いだだろう。そして、その對手を、通常の妻が通常の良人を愛するように愛しただろう。

「僕が、始めてだろうね」

修一が、最初の夜を過ごした翌朝、聞いた。

玲子が、憤然とした面持で、むろんの事だと答えると、修一は、許してくれ、怒らないでくれ、信じてはいたが、ただちょっと聞いてみただけだと、滑稽なほど狼狽して詫びたので、玲子は、気を直した。

新婚夫婦は、修一の両親とは別居した。

半歳近く経った。

修一にとっては、甘美極まる日が、玲子にとっては、次第に平凡になってゆく日が続いた。そして、突然、一切が、ひっくり返った。少くも、修一にとっては。

それは、玲子の不在中に起った。

玲子は、母親が病気の報せを受けて、実家に帰っていった。

修一は、結婚以来、始めて、玲子のいない夜を迎えた。

——今夜は、家に帰っても、玲子はいないのだ。

そう思うと、会社が退けてからも、家に戻るのが、怖ろしかった。

夕食は、銀座で済ましたが、遊びにゆく友人の家もなかったし、馴染の女のいるバーもない。

——玲子と結婚する迄、おれは一体どうして毎夜を過ごしていたんだろう。

と、不思議に思われた。

映画館に入ってみたが、何だか落着かない。途中で出た。

結局、玲子がいなくても、玲子の匂いの残っている家に戻るのが一番よいと考えた。

だが、戻ってみると、同じ家が、まるで他人の家のように、さむざむと空虚にみたされていた。

——もし、玲子の母親の容態が悪くて、明日も、明後日も、帰ってこなかったら、どうしよう。

玲子が自分の生活の中で、どんなに大きな位置を占めているかを改めて、しみじみと胸に感じ、

「玲子、玲子」

と、声を出して言ってみた。

何か、玲子を、肉体的に感じさせるものが欲しかった。